

ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会 - 第一

現在の真理の検証

Jeff Pippenger

2025-12-02

聖書の中には理解しがたい事柄があり、ペテロの言葉によれば、無学で心の定まらない者たちはそれらをねじ曲げて自らの滅びを招く。私たちはこの生涯において、聖書のすべての箇所の意味を説明できないかもしれない。だが、実践的な真理の要点で不可欠なものが謎に覆われたままになることはない。神の摂理により、その時代にふさわしい真理によって世が試される時が来ると、人々の思いは御霊によって奮い立てられ、断食と祈りをもって聖書を探り、環が一つまた一つと見いだされて完全な鎖へと結び合わされるまで続けられる。魂の救いに直結するすべての事実は、だれ一人として誤ったり暗闇の中を歩んだりする必要がないほど明らかにされる。

私たちが預言の流れをたどってくるにつれ、私たちの時代のために啓示された真理が明らかに示され、解き明かされてきました。私たちは、自らが享受している特権と、私たちの歩む道を照らす光に対して責任を負っています。過去の世代に生きた人々は、彼らに与えられた光に対して責任を負っていました。彼らの心は、彼らを試す聖書のさまざまな点に関して鍛えられました。しかし、彼らは私たちが理解している真理を理解してはいませんでした。彼らが持っていなかった光に対しては、彼らは責任を負っていませんでした。彼らにも私たちと同じように聖書はありましたが、この地球の歴史の終わりの場面に関する特別な真理が解き明かされる時は、地上に生きる最後の世代においてです。

「特別な真理は、各世代が置かれてきた状況に合わせて与えられてきた。この世代の人々への試しとなっている現在の真理は、はるか昔の世代の人々にとっては試しではなかった。もし今、私たちに照らされている十戒の第四戒である安息日についての光が過去の世代に与えられていたなら、神はその光について彼らに責任を問うたであろう。」『Testimonies』第2巻、692、693頁。

新旧

あらゆる時代において、真理には新たな展開があり、その時代の人々への神のメッセージがある。古い真理はどれも不可欠であり、新しい真理は古いものから切り離されたものではなく、その展開にほかならない。古い真理が理解されてこそ、新しいものを悟ることができる。キリストがご自身の復活の真理を弟子たちに明らかにしようとされたとき、まず「モーセとすべての預言者から」始め、「聖書全体にわたり、ご自身に関する事柄を彼らに説き明かされた」。ルカ 24:27。だが、古いものを栄えさせるのは、真理の新たな展開のうちに輝く光である。新しいものを退けたりおろそかにしたりする者は、実のところ古いものをもってはいない。彼にとってそれは生命力を失い、ただの形骸にすぎなくなる。

新約を退けながら、旧約聖書の真理を信じ、教えると公言する者たちがいる。しかしキリストの教えを受け入れることを拒むことによって、彼らは、族長たちや預言者たちが語ったことを信じていないことを示している。「もしあなたがたがモーセを信じていたなら、わたしをも信じたであろう。彼はわたしについて書いたからである。」とキリストは言われた。ヨハネ

5:46. したがって、彼らの旧約聖書についての教えにも、真の力はない。

福音を信じ、教えていると主張する多くの人々が、同様の誤りに陥っている。彼らは旧約聖書を脇に置く。しかしキリストはそれについて、「それらこそ、わたしについて証しするものである」と宣言された（ヨハネ 5:39）。旧約を拒むことは、実質的には新約を拒むことでもある。両者は切り離せない一つの全体の一部だからである。誰も、福音抜きに神の律法を正しく示すことも、律法抜きに福音を正しく示すこともできない。律法は具現化された福音であり、福音は展開された律法である。律法は根であり、福音はそこから咲き、実る芳しい花と実である。

「旧約聖書は新約聖書を照らし、新約聖書は旧約聖書を照らす。いずれも、キリストにおける神の栄光の啓示である。どちらも、熱心に求める者に対して、意味の新たな深みを絶えず明らかにする真理を示している。」『キリストの実物教訓』128頁

「現在の真理」とは、定義上、「はっきりと見いだされ、説明される」特定の期間における「啓示された真理」のことである。「現在の真理」が啓示される時代に生きる世代は、その真理を受け入れることに対して「責任を負って」おり、受け入れなければ滅びる。「この世代」のための「現在の試しの真理」を構成する諸真理の総体は、「この地の歴史の終幕に関する」「特別な」諸真理の「展開」のうちに表されている。真理、したがって「現在の真理」は、旧約との関係において新約によって型示されている。真理は二人の証人によって確立され、また真理には、始まりと終わり、文字通りのものと霊的なもの、古代のもの、現代のもの、アルファとオメガ、最初と最後がある。

第一の天使のメッセージのミラー派的基礎は、第三の天使の「現在の真理」のメッセージに対しては「古いもの」である。「古いものを退けている」者は、事実上「新しいものも退けている」。両者は切り離すことのできない一つの全体の部分だからである。

私は、特に、使者たちが、どこでそれが頭をもたげるのを見ようとも、あらゆる狂信を見張り、抑える必要性を見た。サタンは四方八方から迫っており、もし私たちが彼を警戒せず、彼の策略と罠に目を開かず、神のすべての武具を身に着けていなければ、悪しき者の燃える矢は私たちに命中するだろう。神の言葉には多くの尊い真理が含まれているが、今群れが必要としているのは「現在の真理」である。私は、使者たちが現在の真理の重要点から外れて、群れを一つにし魂を聖めることに資さない主題に長々と留まってしまふ危険を見てきた。ここでサタンは、働きを損なおうと、可能なかぎりあらゆる利点を利用するだろう。

しかし、二千三百日の期間と関連づけた聖所の問題、神の戒め、そしてイエスの信仰といった主題は、過去の再臨運動を説明し、私たちの現在の立場が何であることを示し、疑う者の信仰を確立し、栄光ある将来に確信を与えるのに、まことにうってつけである。私はしばしば見せられたが、これらこそが、使者たちが詳しく取り扱うべき主要な主題であった。『初期の著作』63ページ

「2300日、神の戒め、イエスの信仰と関連する聖所」は、ミラー派の「過去の再臨運動」を説明する鍵であり、そのことによって「私たちの現在の立場が何であるか」を「完全に」説明することができる。「過去の再臨運動」を「疑っている」者は、「栄光に満ちた未来への確実性」を与えるものを「疑っている」のである。未来に確実性を与えるのは過去である。

ヨエル書は、現代における試金石となる真理のメッセージである。これは複数の証人によって確認されている。黙示録のヨハネによれば「イエスの証し」であるところの「預言の霊」によって、ヨエル書は「現在の真理」であると認められている。

これはイエス・キリストの啓示である。神はこれを、しもべたちに必ず間もなく起こるべき事柄を示すために彼に与え、御使いを遣わして、それをしるしによってそのしもべヨハネに示した。ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、また自分が見たすべての事柄を証した。黙示録 1:1, 2.

「ヨハネの『証し』（彼が『証しした』もの）は、三つに分けて描かれている。彼は『神の御言葉』、『イエスの証し』、そして『自分が見た事柄』を記した。黙示録の最初の二節において、ヨハネは『預言の霊』という賜物を与えられた者として示されている。この賜物には、神の御言葉の特別な啓示が含まれるだけでなく、キリストの言葉を通して預言者に伝えられる特別な啓示（キリストご自身によって、あるいはその御使いを通して）も含まれている。さらにこの賜物には、夢や幻を媒介として示される真理も含まれる。『預言の霊』とは、預言者に授けられるキリストの証しであり、天使やキリストが語ったのと同じ権威を帯びている。」

私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると彼は私に言った。「そんなことをしてはならない。私はあなたや、イエスの証しを持つあなたの兄弟たちと同じしもべである。神を礼拝しなさい。イエスの証しは預言の霊なのだから。」ヨハネの黙示録 19章10節

ガブリエルは、自分がヨハネと同じしもべであり、礼拝されるべきではないことを明らかにする。さらに、ガブリエルは、ヨハネによって代表される「兄弟たち」は「イエスの証し」を持っており、それが「預言の霊」であることを示す。ヨハネが代表する「兄弟たち」は十四万四千人であり、その兄弟たちは皆「預言の霊」を持っている。

彼らは朝早く起き、テコアの荒野へ出て行った。彼らが出て行くとき、ヨシャパテは立って言った。「ユダよ、またエルサレムの住民たちよ、わたしに聞け。あなたがたの神である主を信じなさい。そうすればあなたがたは堅く立つことができる。主の預言者たちを信じなさい。そうすればあなたがたは栄える。」歴代誌下 20:20

「あなたがたの神、主を信じなさい。そうすれば、あなたがたは堅く立つであろう。主の預言者たちを信じなさい。そうすれば、あなたがたは栄えるであろう。」

イザヤ書 8:20。「律法と証しに照らせ。もし彼らがこの言葉に従って語らないなら、彼らのうちに光がないからだ。」ここに神の民の前に二つの聖句が示されている。成功のための二つの条件である。ヤハウエご自身が語られた律法と、預言の霊は、あらゆる経験においてその民を導く知恵の二つの源である。申命記 4:6。「これが諸国民の前

におけるあなたがたの知恵であり悟りである。彼らは言うだろう、『まことにこの大いなる国民は賢く悟りのある民だ』と。」

神の律法と預言の霊は、教会を導き助言するために手を携えて働いており、教会が神の律法に従うことによってこのことを認めるたびに、預言の霊が真理の道へと教会を導くために遣わされてきた。

黙示録12章17節。「そこで、龍は女に対して激しく怒り、神の戒めを守り、イエス・キリストの証しを持つ、彼女の子孫の残りの者たちと戦いをしようとして出て行った。」この預言は、残りの者の教会が神の律法を重んじ、預言の賜物を持つことを明確に示している。神の律法への従順と預言の霊は、常に真の神の民を見分けてきたものであり、その試しは通常、現在の現れにおいて課される。

エレミヤの時代、人々はモーセやエリヤ、エリシャのことばには何の疑いも抱かなかったが、神がエレミヤに与えられたことばについては疑い、それを退け、その力と勢いが空しくなるまでそうし続け、ついには神が彼らを捕囚に連れ去るほかに救いの手立てはなくなった。

同様に、キリストの時代には、人々はエレミヤのメッセージが真実であったことを知っており、もし自分たちが父祖の時代に生きていたならばそのメッセージを受け入れたはずだと自分たちに言い聞かせていたが、同時に、すべての預言者が書き記していたキリストのメッセージを退けていた。

神の律法をその全き姿と力において教会に明らかにするための第三天使のメッセージが世に現れたとき、預言の賜物もまた直ちに回復された。この賜物は、このメッセージの発展と推進においてきわめて重要な役割を果たしてきた。

「聖書の解釈や働きの方法に関して意見の相違が生じ、それがこのメッセージを信じる者たちの信仰を動揺させ、働きに不一致を招きかねないとき、預言の霊はいつも事態に光を投げかけてきた。それは常に、信者の群れに思いの一致と行動の調和をもたらしてきた。メッセージの展開と働きの成長の途上で起こったあらゆる危機において、神の律法と預言の霊の光に堅く立った者たちは勝利を収め、彼らの手によって働きは栄えた。」Loma Linda Messages, 33、34。

ヨエル書は、預言の霊において「現在の真理」として明確に位置づけられており、ヨハネの黙示録によれば、その預言の霊はイエスの証しである。これは神の御言葉の中でも直接に支持されている。聖書と預言の霊は共に、ヨエル書を終わりの時代に直接適用している。

古代の預言者たちは皆、自分たちの時代のためというよりも、むしろ私たちのために語った。したがって、彼らの預言は私たちに対して有効である。「これらの事が彼らに起こったのは模範のためであり、また、それらは、世の終わりが臨んだ私たちへの戒めとして書き記されたのである。」コリント人への第一の手紙 10章11節。「彼らが仕えたのは自分自身のためではなく、私たちのためである。すなわち、天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた人々によって今あなたがたに伝えられているこれらの事であり、天使たちもそれをうかがい見たいと願っている。」ペテロの第一の手紙 1章12節。...

「聖書は、この最後の世代のために、その宝を蓄え、ひとまとめに束ねてきた。旧約聖書の歴史におけるすべての偉大な出来事と厳粛な事柄は、この終わりの時代の教会において、これまでも、そして今もなお、繰り返されている。」『セレクトッド・メッセージズ』第3巻、338、339頁。

ヨエル書の預言は、「世の終わりが臨んだ」人々「に対して」「有効」である。「有効」というのは、単に「現在の真理」が常に試しであることを強調しているにすぎず、その試しに失敗する者は、ユダのような聖書の人物によって表されている。

次から次へと与えられた教訓も、ユダの耳には留まらなかった。今日、どれほど多くの者が彼の跡をたどっていることか。神の律法の光に照らされ、利己的な人々は自分の悪しき品性を目にするが、求められている改心をせず、罪の一つの状態からまた別の状態へと進んでいく。

キリストの教えは、私たち自身の時代と世代にも通用する。彼は言われた。「わたしが祈るのはこの者たちのためだけではなく、彼らの言葉によってわたしを信じる者たちのためでもある。」ユダに与えられたのと同じ証しが、この終わりの時代にも私たちにもたらされている。彼が自分の生活に生かすことに失敗した同じ教訓が、聞く人々のもとにも届くが、彼らもまた自分の罪を捨てないために同じ失敗を犯す。Review and Herald, 1891年3月17日。

ヨハネは黙示録全体を通して神の終わりの時代の民を象徴しており、パトモス島に流されたことによって、日曜法の危機において迫害される人々を代表している。彼はなぜ投獄されたのかを述べている。

私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、苦難における仲間、そしてイエス・キリストにある御国と忍耐にあずかる者として、神の言葉のため、またイエス・キリストの証のために、パトモスと呼ばれる島にいた。黙示録 1:9

ヨハネは聖書と預言の霊のゆえに迫害を受けた。では、なぜ十四万四千人は預言の霊のゆえに迫害されるのか。預言者ヨエルが最初に指摘する真理は、セブンスデー・アドベンチスト教会の背教である。使徒ペテロがペンテコステはヨエル書の成就であると示したのは、ユダヤ人が「異言」の現れを攻撃したことへの応答としてであった。当時のユダヤ人は終わりの時代のセブンスデー・アドベンチストの型であり、ペテロとそのメッセージを宣べ伝える者たちは「酔っている」と論じていた。セブンスデー・アドベンチストは、ペテロの時代のユダヤ人がそうしたように、後の雨のメッセージに逆らって戦うだろう。彼らがそうするのは、後の雨の「現在の真理」という試金石となるメッセージを宣べ伝えている者たちが「古い」土台的な真理を持っているからである。というのも、新しい真理は常に古い真理に基づくからだ。エレミヤは、後の雨の時代における神の民に、古き道を歩み、見張りのラッパの音に耳を傾けるよう呼びかけたが、彼らは拒んだ。基礎となる「古い」真理のメッセージは、レビ記26章の「七つの時」によって象徴的に表されており、そこでは地の安息という観点から契約関係が示されている。

私は、名ばかりの教会と名ばかりのアドベンチストが、ユダのように、真理に敵対するためにカトリックの影響力を取りつけようとして、私たちをカトリック側に売り渡すのを見た。そのとき聖徒たちは目立たない民となり、カトリックにはほとんど知ら

れていない。しかし、私たちの信仰と慣習を知っている教会や名ばかりのアドベンチスト（彼らは安息日のゆえに私たちを憎み、それを反駁できなかったからである）が、聖徒たちを裏切り、彼らは人々の制度をないがしろにする者だ、すなわち安息日を守り、日曜日を無視している者だとカトリックに密告するだろう。

それからカトリックはプロテスタントに、事を進めて、週の第七日の代わりに週の第一日を守らない者は皆殺されるべきだという布告を出すよう促す。多数を占めるカトリックはプロテスタントの側に立つ。カトリックは自分たちの力を獣の像に与える。そしてプロテスタントは、かつて彼らの母がそうしたように、聖徒たちを滅ぼすために行動する。だが、その布告が実を結ぶ前に、聖徒たちは神の御声によって救い出される。Spalding and Magan, 1, 2.

ホワイト姉妹は二度にわたり、「名目上の教会」と「名目上のアドベンチスト」を指摘し、その二つの「名目上のグループ」と「カトリック教徒」とを区別している。「名目上の教会」と「名目上のアドベンチスト」は、ペテロとヨハネに代表される者たちを、「安息日のゆえに、それを論駁できなかった」ために「憎んだ」。名目上の教会とカトリック教徒は、第七日安息日の真理を「論駁」できず、「名目上のアドベンチスト」は、レビ記二十六章の「七つの時」、すなわち地に関する安息日の戒めを「論駁」できない。名目上の教会とカトリック教徒は、第七日安息日が「基礎的な」聖書の真理であるという事実を「論駁」できず、「名目上のアドベンチスト」は、レビ記二十六章の「七つの時」が「基礎的な」ミラー派の真理であるという事実を「論駁」できない。

パトモスにおけるヨハネの囚われは、聖書と預言の霊の双方を堅持し、外からは第七日安息日をめぐって、内からは地のための安息年（第七年）をめぐって、特に迫害される十四万四千人を象徴している。このため、九節でヨハネがなぜ迫害されていたのかを証言した後に、十節にある安息日と、「ラッパ」のような「大きな声」による「後ろ」（過去）からのメッセージが続いている。

わたし、ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、患難と、イエス・キリストにあっての御国と忍耐とを共にする者であるが、神のことばとイエス・キリストの証しのために、パトモスと呼ばれる島にいた。主の日に、わたしは霊にあって、背後にラッパのような大きな声を聞いた。ヨハネの黙示録1章9、10節。

ヨハネは、9/11に、神の民にエレミヤの「昔からの道」に立ち返るよう呼びかける、黙示録18章の御使いのラッパの声を聞いた者たちを表している。その大いなる声はまた、第七のラッパの警告、すなわち第三のわざわいでもあった。

ホワイト夫人は、「聖書はその宝をこの最後の世代のために積み重ね、一つに束ねてきた」と記している。ヨエル書は、「終わりの日」における「現在の真理」である聖書の「宝」の一つである。ペンテコステの時、ペテロは、その時まさに成就していたのがヨエル書であることを指摘した。ペテロは、ヨエルと同様に、ペンテコステの時期のために語ったというよりは、むしろ私たちの「時」のために語った。ペンテコステの時期は、キリスト教時代における初雨であった。ペンテコステはキリスト教時代の始まりを画し、そのことによってその時代の終わりをも示している。キリスト教時代の終わりは、ペンテコステによって型示されているように、後の雨の時である。ゆえにペテロは、ヨエル書を用いて

聖霊の注ぎの成就を見分ける、キリスト教時代の終わりにいる神の民の象徴なのである。

しかしペテロは十一人とともに立ち上がり、声を張り上げて彼らに言った。「ユダヤの人々、またエルサレムに住むすべての人々よ、このことを知っておきなさい。わたしの言葉に耳を傾けなさい。あなたがたが思っているように、彼らは酔ってはいない。いまはまだ一日の第三時にすぎないのだから。むしろ、これは預言者ヨエルによって語られたことなのだ。『終わりの日に、神は言われる、わたしはわたしの霊をすべての人に注ぐ。するとあなたがたの息子たちと娘たちは預言し、若い男たちは幻を見、年老いた男たちは夢を見る。その日、わたしはわたしのしもべたちと、はしためたちの上にも、わたしの霊を注ぐ。彼らは預言する。わたしは上なる天に不思議を、下なる地にしるしを現す。血と、火と、煙の立ちのぼる蒸気とを。主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽は暗闇に変わり、月は血に変わる。そして、主の名を呼び求める者は、だれでも救われる。』」使徒の働き 2:14-21

預言を学ぶ者として成功するには、世の終わりが聖書の歴史叙述の中で「行に行を重ねて」描き出されているのだという確固たる理解が必要である。この真理に関連して、預言者たち自身が終わりの日の神の民を表しているということがある。ヨエルは、自らの書を終わりの日に位置づけている。というのも、それは「主の日」の接近を告げているからである。

シオンで角笛を吹け。わが聖なる山で警報を吹き鳴らせ。地に住むすべての者は震えよ。主の日が来るからだ。まことに、それは近い。ヨエル書 2:1

象徴としての「ラッパ」は、さまざまな意味の一つとして、警告のメッセージを表す。象徴としてのラッパは、文脈に応じて、期間や時点、あるいはその両方を表すことができる。また、ラッパは裁きも表す。

贖罪日の十日前にあるラッパの祭りは、迫り来る裁きへの警告であった。

「主の日」は、その語が用いられている箇所文脈に応じて、時の一点を指すこともあれば、ある期間を指すこともある。「主の日」は、最後の七つの災いとして表される執行的裁きの象徴である場合もあれば、千年期の終わりにおける執行的裁きそのものである場合もある。いずれの場合にも、ラッパは神の執行的裁きを指し示している。したがって、「主の日」は、神の刑罰が下される時点、または神の刑罰が下される期間を表しうる。

『主の日』と同様に、『ラッパ』は、黙示録八章と九章の七つのラッパが表す歴史上の時点と期間が証ししているように、ある時点とある期間を表しうる。ヨエルが、吹き鳴らされるべき『ラッパ』によって表している『主の日』は、死者の裁きが終わり、生ける者の裁きが始まったときに始まる、時点であると同時に期間でもある。9/11にはラッパが吹き鳴らされ、生ける者の裁きの到来を一つの時点として示すとともに、生ける者の裁きの期間の始まりとして9/11をも画した。

それゆえ今もなお、主は言われる。心を尽くして、断食と泣きと嘆きをもって、わたしに立ち返れ。衣を裂くのではなく、心を引き裂き、あなたがたの神、主に立ち返れ。主は恵み深く、あわれみ深く、怒るのに遅く、いつくしみに豊かで、災いを思い直されるからだ。主が立ち返り、思い直して、祝福を後に残してくださるかどうかが、誰が知ろうか。すなわち、あなたがたの神、主への穀物のささげ物と注ぎのささげ物を。シ

オンでラッパを吹き鳴らせ. 断食を聖別し、厳粛な集会を召集せよ. ヨエル書
2:12-15.

ヨエル書でラッパを吹き鳴らすよう命じられるのは、これが二度目である. ヨエル書における「ラッパ」は、迫り来る七つの最後の災いによる執行審判の警告であると同時に、ラオディキアへの悔い改めの呼びかけと恩恵期間の差し迫った終わりという文脈に位置づけられている.

声を限りに叫べ、ためらうな. ラッパのようにあなたの声を上げ、わたしの民にその背きを、ヤコブの家にその罪を告げよ. イザヤ書58章1節.

イザヤ、ヨエル、ヨハネ、ペテロは皆、終わりの日の十四万四千人を表しており、ラッパをいつ吹き鳴らすべきかを示すエレミヤも同様である.

主はこう言われる. 道の分かれ道に立ち、見渡し、昔からの道、どこに良い道があるかを尋ね、その中を歩め. そうすれば、あなたがたは魂の安らぎを見いだす. しかし彼らは、「私たちはそこを歩まない」と言った. また、私はあなたがたの上に見張り人を立て、「ラッパの音に耳を傾けよ」と言った. しかし彼らは、「私たちは聞かない」と言った. エレミヤ書 6:16、17.

この終わりの時代に、9/11にラッパが鳴り響き、その後、善き道を選んでその道を歩む者たちの上に後の雨が降り始めた. そのとき、黙示録18章の天使が下って来た.

後の雨は神の民の上に降り注ぐ. 力ある天使が天から下ってきて、全地はその栄光で照らされる. 『Review and Herald』1891年4月21日.

9月11日にニューヨークの巨大な建物が倒されたとき、強い御使いが降りてきて、後の雨が降り始めた.

「いま、私がニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という話が出ていますか. 私はそのようなことは一度も言っていません. そこに次々と階を重ねて建ち上がっていく巨大な建物を見ながら、私はこう言いました. 『主が立ち上がり、この地を激しく揺り動かされるとき、どれほど恐ろしい光景が起こることだろう! そのとき、黙示録18章1節から3節の言葉が成就するだろう.』 黙示録第18章全体は、この地上に臨もうとしている事柄への警告です. しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかについて、私には特別な光は与えられていません. ただ、いつの日か、そこでそびえる大建造物が、神の力によってひっくり返され、打ち倒されることは知っています. 私に与えられた光によって、私は世に破壊があることを知っています. 主のひと言、全能の力のひと触れによって、これらの巨大な建造物は倒れるのです. 私たちの想像を絶するほどの恐ろしい光景が起こるでしょう.」 Review and Herald、1906年7月5日.

9/11に、後の雨は、日曜法における完全な注ぎ出しに先立って、ぱらつき始めた.

福音の偉大な業は、その開幕を特徴づけた神の力の顕現より劣った現れをもって終わることはない. 福音の開幕において「前の雨」の注ぎの中で成就した預言は、その終わりにおいて「後の雨」によって再び成就する. ここに、使徒ペテロが次のように言ったときに待ち望んだ「回復の時」がある. 「それゆえ、悔い改めて立ち帰りなさい.

そうすれば、主の御前から回復の時が来るとき、あなたがたの罪がぬぐい去られるようになる。そして主はイエスを遣わされる。」使徒行伝3:19, 20. 『大論争』 611、612ページ.

「回復の時」の完全な成就是、人が生きている間に起こる。なぜなら、警告は「悔い改めよ」であり、死んでいてはそれは不可能だからだ。「回復の時」は、生ける者の「罪」がまだ「ぬぐい去られる」可能性があるときに到来する。「回復の時」は9月11日に始まり、したがって生ける者の裁きの始まりを示した。五旬節は福音時代の終わりに繰り返される。「回復の時」が到来したとき、五旬節に型示された出来事が繰り返され始めた。

私は、あの時にもまさる力をもって五旬節の日の出来事が繰り返される時を、切なる思いで待ち望んでいる。ヨハネはこう言う。「私は、大いなる力を帯びた別の御使いが天から下ってくるのを見た。地はその栄光によって照らされた。」その時には、五旬節のときと同じように、人々はそれぞれ自分の言葉で自分たちに語られる真理を聞くことになる。

主は、まことにご自身に仕えたいと願うすべての魂に新しいいのちを吹き込み、祭壇から取った火のついた炭でその唇に触れて、主の賛美を雄弁に語る者とするのがおできになる。幾千の声が、神の御言葉の驚くべき真理を語り出す力に満たされるであろう。どもる舌は解き放たれ、臆病な者は強められて、真理のために勇敢に証しする者とされるであろう。どうか主が、ご自分の民を助けて、魂の宮からあらゆる汚れを清めさせ、また、後の雨が注がれるときそれにあずかることができるほど、主との親しい交わりを保たせてくださいますように。Review and Herald, 1886年7月20日

続きは次回の記事でお届けします。

私に語っていた御使いがまた来て、眠りから起こされた人のように私を起こし、私に言った、「何が見えるか。」私は答えた、「見ました。すると、純金の燭台があり、その頂には鉢があり、その上に七つの灯があつて、その七つの灯に通じる七つの管がありました。またそのそばには二本のオリーブの木があり、一つは鉢の右側に、もう一つはその左側にありました。」

それで、私は私に語りかけていた御使いに答えて言った。「わが主よ、これらは何ですか。」すると、私に語りかけていたその御使いは答えて私に言った。「あなたはこれらが何であるか知らないのか。」私は言った。「いいえ、わが主よ。」

すると彼は私に答えて言った。「これはゼルバベルへの主の言葉である。『勢いによらず、力によらず、ただわが霊によって』と万軍の主は仰せられる。」ゼカリヤ 4:1-6.